

Essay

Sapiarc.com

2013年5月5日(2013-5)

ミャンマーと日本

最近ミャンマーのことがマスコミに取り上げられることが多くなった。軍事政権の政策転換によって、民主的な政治に移行するという大きな変化が起きつつあるからだ。これまでは、中国以外の国の企業は積極的にミャンマーに進出することを控えていたが、その状況は変わり始めている。日本は、欧米諸国とは違って、軍事政権を承認しているので、本来は企業の進出も可能だったのだが、軍事政権と対立してきたアメリカ政府に遠慮して、積極的な進出を控えてきたというのが実情である。その状況は様変わりしつつあり、アジアでは、ミャンマーはこれから開発できる最後の国だとまで言われている。

そのような情勢のなかで、去る4月半ばに、今では野党「国民民主連盟」の党首(正式には中央執行委員会議長)で連邦議会議員にもなっているアウン・サン・スー・チー女史(英語表記は Aung San Suu Kyi だが、ミャンマーではアウンサンスーチーと一語で呼ぶらしい)が1週間ほど来日して、各方面の関係者と話し合った。彼女は1985年から86年にかけて、京都大学東南アジア研究センターの客員研究員だったことがあり、そのときから27年ぶりの来日だった。彼女は、来年行われる大統領選挙に出馬する予定で、状況が急に変わらない限り、おそらく当選するだろう。

既にオバマ大統領はミャンマーを訪問したが、安倍首相も訪問を考えているようだ。こういう動きは結構なことなのだが、私には気になることがある。それは、日本のマスコミの関心が、ミャンマーの開発に我が国の企業がどのように

関わり、それによって、どれだけ利益を上げることができるかに集中しているように見えることだ。最近、エコノミック・アニマルという言葉は聞かなくなったが、今の日本の政府、企業もマスコミも全部がエコノミック・アニマルになったかのようだ。グローバリゼーションのせいで、中国、韓国はもちろん、先進国はどれもエコノミック・アニマルになってしまった。つまり、どの国も日本をエコノミック・アニマルと馬鹿にすることはできなくなってしまった。それが今の世の中だ。

ミャンマー (Myamma, 英語表記は Myanmar) は1989年から軍事政権が正式国名として使い出したものだが、実は、文語的な国名として昔からあり、口語のバーマ (Bama) と共存していたものだ。英語の Burma は Bama から来たのだろうが、日本では、江戸時代からオランダ語経由でビルマという名称があった。Wikipediaを見ると、この国にはいろいろな面で複雑なところがあることがわかる。そもそも、多民族国家であって、ビルマ族は60%台で、残りは8つの少数民族が占めている。ところが、ビルマ族がこの国に姿を現したのは11世紀になってからだというのだから、意外な感じがする。その後の歴史も極めて込み入っていて、隣接するインド、中国、タイなどとの関係が強く、そういう国々を巻き込んだ戦争がしばしば起きていた。

19世紀になってから、インドを領有していたイギリスとの関係が悪化して、結局1886年に英領に組み入れられてしまい、インドの1州

のような扱いになった。1886年は明治19年だから、案外昔のことではない。それ以来、ビルマの独立回復の動きがあったが、1930年代になってから、日本陸軍の特務機関（のちに南機関と呼ばれた）がビルマの独立運動を援助しはじめ、それに乗ったのが、アウンサン・スーチー女史の父親のアウンサンだった。アウンサンは1915年生まれなので、このときはまだ20歳代の若者だった。

太平洋戦争が1941年12月に勃発し、日本陸軍は仏印（現在のベトナムなど）、マレー半島（マレーシア）を経て、シンガポールを短時間に攻略した。ここまでは、計画したとおり以上にうまく進んだため、次にビルマも攻略したが、実は、これは戦前に十分準備されていなかったと言われている。つまり、勢いに乗ってやってしまったことだったようだ。

日本軍は、1942年3月にラングーン（現在のヤンゴン）を陥落させたが、そのとき、アウンサンが組織したビルマ軍は日本軍に協力した。その後、ビルマ各地で戦闘はあったが、日本軍は比較的簡単にビルマ全土を平定することに成功した。支配者だったイギリス人と英軍の一部はアラカン山脈を越えてインドのアッサム州に逃げたが、捕虜になったものも多かったようだ。中国軍もビルマ国内に居たが、これも一部はインドに逃れ、他は東側の国境を越えて、自国の雲南省に退却した。その後の1年半ほどは平和なときで、ビルマ人は一般に日本軍に協力的だったと言われており、アウンサンのビルマ軍との間もうまく行っていたようだ。

もともと何故太平洋戦争が起きたのかということを考えてみると、日本軍にビルマ攻略の準備ができていなかったというのは実にわかりにくいことだ。というのは、日本は中国（当時は支那という呼び方が普通で、日中戦争とは言わず支那事変と言った）との戦争に行き詰まり、その原因はアメリカやイギリスが中国を援助することにあるとして、主として対米英の戦争を始めることになってしまったからだ。重慶にあった中国政府の主席蒋介石の名を取った援蒋ルートというものがあるが、その主なものは仏

印経由とビルマ経由だったのだから、仏印だけでなく、ビルマも押さえることは必要だったのだが、何故か日本陸軍は本気で考えていなかったようだ。

しかし、結果としてビルマも押さえたので、援蒋ルートはビルマの北方のインドからの道（レド公路と言われた）と空輸になった。片や日本軍は太平洋方面での戦闘に手一杯になってしまい、ビルマへの補給はほとんどなかったようだ。日本陸軍は1943年の終わりまでに、ビルマの制空権を失ってしまっており、1944年になって始まった地上戦闘は極めて不利な条件下で行われた。北方ではレド公路を切断しようとしたフーコン作戦、東方ではビルマに隣接する中国の雲南省での断作戦、西方では、インド・アッサム州の都市インパールとコヒマを目指したインパール作戦が行われた。これらは、いずれも最終的には日本軍の敗北に終わった。

これらの戦闘について書かれた書物は多数あるが、私が読んだものは、そのうちの数冊に過ぎない。ビルマ全土での戦いについて書かれたものとしては、後勝（うしろ・まさる）著「ビルマ戦記」（光人社）が比較的良いと思う。この著者はビルマ方面軍司令部で一番若い参謀だった人で、ビルマに入ったのはかなり遅く、インパール作戦が始まるころだったようだが、師団参謀などより格上の方面軍司令部参謀としては珍しく、ビルマ各地での戦闘の様子を実際に見て回って、その経験に基づいて書いたものが本書だ。空襲で、自分の居た建物が直撃弾を受けて壊滅する直前に、蝟壺型の防空壕に飛び込んで、命拾いをした経験もしている。

インパール作戦については、伊藤桂一著「遙かなインパール」（光人社）を読んだ。この作戦では、北侵攻路、中央侵攻路、南侵攻路を担当する3つの兵团があったが、この本は、中央侵攻路を担当した祭兵团（第15師団）の歩兵第60聯隊の悪戦苦闘と凄愴を極めた退却時の状況を、生還した人たちから詳しく聞いて書かれたもので、迫真の記録になっている。相良俊輔著「菊と龍」（光人社）は、フーコン作戦を担当した菊兵团（第18師団）と断作戦の中で最も悲劇的だった

た拉孟(らもう)と騰越の戦いを担当した龍兵団(第56師団)の奮戦の記録だが、戦記にありがちな手柄話的な面もないわけではない。菊(第18師団)と龍(第56師団)はいずれも北九州出身者で構成された兄弟師団である。

これらの他には、古山高麗雄の3部作「断作戦」、「龍陵会戦」、「フーコン戦記」(いずれも文芸春秋社)を読んだ。これらは小説だが、龍陵会戦を兵士として体験した著者が綿密な取材に基づいて書いたもので、記録としての価値もある。小説としては、一番長い時間をかけて書かれた「フーコン戦記」が優れていると思う。

これらの本を読んで感じることは、ビルマでの戦いは、日本陸軍の良い面と悪い面とが全部出たものだったということだ。言い換えると、日本人の特質が嫌というほどよくわかるのだ。インパール作戦は典型的な例だ。作戦計画は極めて杜撰なもので、現地軍の上層部にも強い反対があったにも拘わらず、牟田口廉也第15軍司令官のごり押しで、実施された。非常識な作戦計画の下でも、第一線の下級将校、下士官、兵は実によく頑張り、その結果多くの戦死者を出した。惨敗に終わったのだが、牟田口は1966年に死去するまで自分の責任を認めなかった。

中国軍と戦った断作戦や龍陵会戦では、兵力差が歴然としており、中国兵15対日本兵1だったというのが通説になっている。兵器と弾薬の量にも大差があり、中国軍は猛烈な砲撃のあとに、大挙して攻め寄せたが、日本軍兵士は無駄弾を使わずに正確に射撃し、白兵戦で撃退した。これを繰り返すと、補充のない日本軍は、兵士の数が漸減して、最後には全滅かそれに近い状態にまでなった。不利な状況のなかでも、不思議なぐらい日本軍の士気は高く、規律は最後まで乱れなかった。こういう歴史は、現代の日本でもっと知られるべきだと思う。

4月28日の朝日新聞の「声」欄に、次の意見が掲載されていた。私も心の底から同感できるので、ここに引用させていただくことにする。

『「議員の靖国参拝は誰のために」 森本清武(70)』

(前略) 私の父は1944年にミャンマーのインパール作戦で戦死しました。(中略) 母のように夫や肉親を亡くした人が個人的に靖国参拝することには異存はありませんが、国会議員たちが集団で、一体何のために参拝するのでしょうか。父の遺骨はありません。遺骨がなくても父は郷里の墓で眠っています。それで良いと思います。父が靖国神社で祀られていても私は何も誇らしく感じません。愚かな戦争を反省し、近隣諸国と友好を図ることこそが政治家の務めではないでしょうか。』

既に、ミャンマーの各地に戦没者を追悼する碑などがあるようだが、これからミャンマーに工場を建てる日本の企業は、その敷地から兵士の遺骨などが出る可能性が大いにあることに予期しているべきだ。もしそういうものが出た場合は、丁重に扱ってもらいたいと思う。(おわり)